

公衆衛生 書評

日本の医療と疫学の役割—歴史的俯瞰— 森岡聖次・重松逸造著，克誠堂出版

評者 多田羅浩三 大阪大学名誉教授，放送大学教授

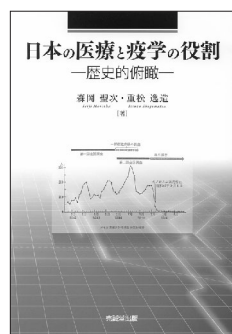
日本の医療は，人々の結核とのたたかい，脳卒中の制圧に輝かしい成果をあげてきた。そして昭和61年には日本人の平均寿命は，男女ともに世界一の輝かしい記録を達成した。そのような日本の医療は，地道で目立たない，多くの優れた疫学研究によって支えられ，推進されてきた。森岡聖次先生と重松逸造先生が，この2月に上梓された『日本の医療と疫学の役割—歴史的俯瞰』は，そのことを余すところなく教えてくれる。

本書は，第1章「疫学事始」，第2章「日本の疫学誕生期」，第3章「成長期の疫学」，第4章「発展期の疫学(その1)」，第5章「発展期の疫学(その2)」，第6章「拡大期の疫学(その1)」，第7章「拡大期の疫学(その2)」，第8章「疫学のこれから」の8つの章から成っている。

本書の最も大きな特徴は，江戸期から現代まで，日本の疫学研究の歩みを彩ってきた数々の業績を渉猟して，それらによって拓かれた新しい地平について，すべてオリジナルの論文，著書をもとに紹介していることである。きわめて詳細であり，感動的でさえあると言える。各章においてほぼ50～100，計622の文献が引用されている。

また高木兼寛，緒方正清，藤浪鑑の疫学，あるいは感染症，がん・循環器疾患，公害病，生活習慣病の疫学，臨床疫学，環境疫学など，広く多様な視点から疫学研究

定価 4,410 円，克誠堂出版(TEL 03-3811-0995)，2009



の成果が系統的に紹介されているので判りやすく，辞書のように利用できるということも，かけがえのない本書の特徴になっていると思われる。

著者は，「本書を通じて，日本の疫学研究の萌芽が江戸時代に求められること，術語としての疫学の定着に至る小史，戦後の疫学の目覚ましい拡大，原因不明疾患へのアプローチ，臨床現場での疫学の活用などについて御理解いただければ幸いである」と述べている。

日本の疫学研究の成果に対する体系的な理解は，専門家の中でも，これまで決して十分なものであったとは思えない。その点，本書によって，日本の疫学について，時代を超えた全体像を持つことができる，こんなにありがたいことはない。日本の疫学研究の長い優れた伝統に，改めて誇りを持つことができる，これほど嬉しいことはない。

本書は，まさに森岡先生の現場の視点に立った壮烈な探究心と，重松先生の史的視点に立った疫学を思う深い思想があって生まれた著作であり，歴史に残る労作である。わが国の医療，疫学を担うすべての人が，座右の書として手許において活用して欲しい1冊である。